(19)日本国特許庁(JP)　(12)特　許　公　報(B2)　(11)特許番号
特許第5672871号
(P5672871)
(45)発行日　平成27年2月18日(2015.2.18)　(24)登録日　平成27年1月9日(2015.1.9)

(51)Int.Cl.　　F I
A47J 31/06 (2006.01)　　A47J 31/06　A
B65D 77/00 (2006.01)　　B65D 77/00　D

請求項の数 7　(全 12 頁)

(21)出願番号　特願2010-200442(P2010-200442)
(22)出願日　平成22年9月8日(2010.9.8)
(65)公開番号　特開2011-78747(P2011-78747A)
(43)公開日　平成23年4月21日(2011.4.21)
審査請求日　平成25年4月5日(2013.4.5)
(31)優先権主張番号　特願2009-207575(P2009-207575)
(32)優先日　平成21年9月8日(2009.9.8)
(33)優先権主張国　日本国(JP)

(73)特許権者　396015057
大紀商事株式会社
大阪府大阪市中央区南久宝寺町３丁目６番６号　御堂筋センタービル２Ｆ
(74)代理人　110000224
特許業務法人田治米国際特許事務所
(72)発明者　斎藤　充範
大阪府大阪市中央区博労町１－７－２　大紀商事株式会社内
(72)発明者　山口　南生子
大阪府大阪市中央区博労町１－７－２　大紀商事株式会社内
(72)発明者　西口　裕晃
大阪府大阪市中央区博労町１－７－２　大紀商事株式会社内
最終頁に続く

(54)【発明の名称】ドリップバッグ

(57)【特許請求の範囲】
【請求項１】
通水性濾過性シートから形成され、上端部に開口部を有する袋本体と、
袋本体の対向する２面の外表面に設けられた掛止部材とを有するドリップバッグであって、
掛止部材が、袋本体の開口部に沿って袋本体に貼着されている上部貼着部と、
上部貼着部から袋本体の底部側に延設され、少なくともその底部側の一部が袋本体に貼着されている中央貼着部と、
中央貼着部の左右両側に形成されたアーム部であって、該アーム部の下端部と中央貼着部の下端部とが連続し、該アーム部の上端部は袋本体に貼着されていないことにより、袋本体から引き起こし可能に形成されているアーム部と、
アーム部の外側に形成され、アーム部の上端部と連続し、袋本体に貼着されていない掛止部と、
アーム部の少なくとも下端部外側に隣接し、袋本体に貼着されている外側貼着部を有するドリップバッグ。
【請求項２】
中央貼着部は、その上端から下端にかけて袋本体に貼着されている請求項１記載のドリップバッグ。
【請求項３】
上部貼着部の幅が、袋本体の開口幅の４５％～５５％である請求項１又は２記載のドリ

ップバッグ。
【請求項４】
上部貼着部の上端部に突出部が形成され、袋本体の上端部から、対向する掛止部材の突出部が、交互に重なることなく突出している請求項１～３のいずれかに記載のドリップバッグ。
【請求項５】
袋本体及び掛止部材の平面形状がそれぞれ扇形である請求項１～４のいずれかに記載のドリップバッグ。
【請求項６】
上部貼着部の幅方向の中心を通る折れ線が、上部貼着部の上端から中央貼着部の下端にかけて形成されている請求項５記載のドリップバッグ。
【請求項７】
請求項１～６のいずれかに記載のドリップバッグの袋本体に抽出材料が充填され、袋本体の上端部が閉じられている飲料ドリップバッグ。
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本発明は、カップ等の容器の上部に掛止することにより、容易にドリップ式でコーヒー、紅茶、緑茶、漢方薬等の抽出液を得られるようにするドリップバッグに関する。
【背景技術】
【０００２】
従来より、手軽に本格的なコーヒーを楽しむことを可能とするコーヒーの入れ方として、ペーパードリップ方式が広く普及している。このペーパードリップ方式では、通常、数杯分のコーヒーが一度に抽出される。
【０００３】
一方、近年、一人暮らしをする者が多くなり、また、核家族化や出生率の低下等により一家族の構成人数も少なくなっている。そのため、従来の数杯分のコーヒーを抽出することが基本とされているペーパードリップ方式に代えて、一杯分のコーヒーの抽出を手軽に行えるようにすることを目的とした、使い捨てのワンドリップコーヒーが種々の製品形態で市場に出回っている。
【０００４】
中でも、簡略な構成を有するものとしては、図８に示すように、通水性濾過性シートからなる袋本体２と、袋本体２の対向する２面の外表面に貼着された紙製等の掛止部材１０とからなるドリップバッグ１にコーヒー粉を充填したコーヒードリップバッグ１００であって、掛止部材１０を特定形状にしたものが提案されている（特許文献１）。
【先行技術文献】
【特許文献】
【０００５】
【特許文献１】特許３１６６１５１号公報
【発明の概要】
【発明が解決しようとする課題】
【０００６】
特許文献１のコーヒードリップバッグ１００によれば、その使用時に、開口部３を大きく広げた状態でカップ２００に容易に装着することができる。特に、袋本体の両側縁部及び上端開口部に沿って補強片３０を設けた態様によれば、開口部３の開口形状を一層大きくし、安定化させることができる。また、従前のカップオン方式のドリップバッグに比して低コストに製造することができる。
【０００７】
しかしながら、近年の価格競争において、ドリップバッグについても構成材料を節減したり、生産時のトラブルを低減させたりすることにより、より一層の低コスト化を図るこ

とが求められている。

【０００８】

これに対し、本発明は、袋本体の開口部が大きく開き、その開口形状が安定化するドリップバッグを、より低コストに提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【０００９】

本発明者は、図８に示したドリップバッグ１のように、袋本体の対向する２面の外表面に掛止部材１０の一部を貼着し、その貼着部分を反対向きに引っ張ることにより袋本体を開口するドリップバッグにおいて、掛止部材１０や補強片３０の構成材料を節減するため、袋本体２の両側縁部及び上端開口部に沿った補強片３０のうち、袋本体２の両側縁部に沿った部分３０ａを省略し、袋本体２の上端開口部に沿った部分３０ｂのみを袋本体２に貼着させたところ、その場合にも袋本体２の開口形状は広く安定化すること、さらにこの袋本体２の上端開口部に沿った部分３０ｂと、掛止部材の中央の貼着部分１０ａとを連続させることにより、掛止部材１０を構成する各部分について、他から切り離された部分をなくすことができ、それにより掛止部材を構成する部分の貼着時の位置ずれを解消できること、を見出した。

【００１０】

即ち、本発明は、通水性濾過性シートから形成され、上端部に開口部を有する袋本体と、袋本体の対向する２面の外表面に設けられた掛止部材とを有するドリップバッグであって、掛止部材が、袋本体の開口部に沿って袋本体に貼着されている上部貼着部と、
上部貼着部から袋本体の底部側に延設され、少なくともその底部側の一部が袋本体に貼着されている中央貼着部と、
中央貼着部の左右両側に形成されたアーム部であって、該アーム部の下端部と中央貼着部の下端部とが連続し、該アーム部の上端部は袋本体に貼着されていないことにより、袋本体から引き起こし可能に形成されているアーム部と、
アーム部の外側に形成され、アーム部の上端部と連続し、袋本体に貼着されていない掛止部とを有するドリップバッグを提供する。

【００１１】

また、本発明は、上述のドリップバッグの袋本体に抽出材料が充填され、袋本体の上端部が閉じられている飲料ドリップバッグを提供する。

【発明の効果】

【００１２】

本発明のドリップバッグによれば、その掛止部をカップに掛けると、掛止部と連続しているアーム部が、袋本体の対向する２面の外表面に貼着されている中央貼着部を互いに反対方向に引っ張るので袋本体が容易に開口し、さらに袋本体の開口部に沿って上部貼着部が形成されているので、袋本体の開口形状が大きく安定化する。

【００１３】

また、この上端貼着部は、袋本体の開口形状を大きく安定化させるために、従来、袋本体の両側縁部と上端開口部に沿って形成されていた補強片から袋本体の両側縁部の補強片を省略したものに対応する。したがって、本発明のドリップバッグによれば、掛止部材の構成材料を低減し、製造コストを低下させることが可能となる。

【００１４】

さらに、本発明のドリップバッグによれば、掛止部材を構成する上部貼着部と中央貼着部とアーム部と掛止部が全て連続しているので、掛止部材を袋本体に貼着するにあたり、各部の位置ずれを無くすことができる。したがって、不良品の発生の低減によっても製造コストを低下させることが可能となる。

【００１５】

加えて、本発明のドリップバッグによれば、それをカップに掛ける際に、掛止部材のどの部分を引っ張ってカップに掛ければよいかが一目瞭然に分かる。したがって、消費者の誤使用を防止することができる。

【図面の簡単な説明】
【００１６】
【図１】図１は実施例のドリップバッグの平面図（ａ）及び使用状態の説明図（ｂ）、（ｃ）である。
【図２】図２は、図１のドリップバッグの製造に使用するドリップバッグ製造用シートの平面図である。
【図３Ａ】図３Ａは実施例のドリップバッグの平面図（ａ）及び使用状態の説明図（ｂ）である。
【図３Ｂ】図３Ｂは、図３Ａのドリップバッグの一対の掛止部材の打ち抜き方の説明図である。
【図４】図４は実施例のドリップバッグの平面図（ａ）及び使用状態の説明図（ｂ）である。
【図５】図５は実施例のドリップバッグの平面図（ａ）及び使用状態の説明図（ｂ）である。
【図６】図６は実施例のドリップバッグの平面図（ａ）及び使用状態の説明図（ｂ）、（ｃ）である。
【図７】図７は実施例のドリップバッグの平面図（ａ）及び使用状態の説明図（ｂ）、（ｃ）である。
【図８】図８は従来のコーヒードリップバッグの使用状態の斜視図である。
【発明を実施するための形態】
【００１７】
以下、本発明のドリップバッグ及び該ドリップバッグにコーヒー等の抽出原料を充填した飲料ドリップバッグを、図面を参照しつつ詳細に説明する。なお、各図中、同一符号は同一又は同等の構成要素を表している。
【００１８】
図１（ａ）は、本発明の飲料ドリップバッグの一形態であるコーヒードリップバッグ１００Ａの一実施例の平面図であり、図１（ｂ）、（ｃ）は、それぞれその使用状態の説明図である。
【００１９】
このコーヒードリップバッグ１００Ａに利用されているドリップバッグ１Ａは、通水性濾過性シート材料からなり、上端部に開口部を有する袋本体２と、袋本体２の対向する２面２ａ、２ｂの外表面にそれぞれ設けられた掛止部材１０Ａからなっている。
【００２０】
このようなドリップバッグ１Ａは、例えば、図２に示すように、一対の掛止部材１０Ａ（その底部側を間隔をあけて対向させたもの）を長尺帯状の通水性濾過性シート２１に所定間隔で複数配置したドリップバッグ用シート２０を用意し、そのシート２０を長手方向の縁辺同士が重なり合うように二つ折りにし、袋本体２の幅の間隔で短手方向に溶着溶断を繰り返すことにより得ることができる。この場合の溶着溶断部が袋本体２の両側縁２ｐ、２ｑ（図１（ａ）において、横線のハッチングを付した部分）となる。また、この短手方向の溶着溶断に先立ち、長手方向の縁辺同士を溶着し、短手方向の溶着溶断を繰り返す間に、コーヒー粉を一袋分ずつ充填していくことによりコーヒードリップバッグ１００Ａを得ることができる。コーヒードリップバッグ１００Ａを製造する場合には、通水性濾過性シート２１には、予め、開封用にミシン目４を施しておいてもよい。なお、ミシン目４に代えて、易開封線として、超音波や熱などで通水性濾過性シート２１にライン状に形成した脆弱部を設けても良い。
【００２１】
袋本体２を形成する通水性濾過性シート２１としては、所定量のコーヒー粉を充填し、注湯した場合にコーヒーの浸出が可能であるものを種々使用することができる。一般に、浸出用シートとしては、例えば、ポリエステル、ナイロン、ポリエチレン、ポリプロピレン、ビニロン等の合成繊維、レーヨン等の半合成繊維、コウゾ、ミツマタ等の天然繊維の

単独又は複合繊維からなる織布あるいは不織布、マニラ麻、木材パルプ、ポリプロピレン繊維等からなる混抄紙、ティーバッグ原紙等の紙類が知られており、本発明においてもこれらを使用することができるが、ドリップバッグの使用後の廃棄性の点から、通水性濾過性シート材料には生分解性繊維を含有させることが好ましい。生分解性繊維としては、ポリ乳酸、ポリブチレンサクシネート、ポリエチレンサクシネート等をあげることができる。また、ドリップ時にコーヒー粉に適度な蒸らし効果も付与できるようにするため、これらの繊維材料から通水性濾過性シートを製造するに際しては、繊維層の空隙率を調整することによりコーヒー粉に直接接することとなる層を「疎」とし、直接には接しない層を「密」とする疎密の複層構造とし、かつコーヒー粉に直接接することとなる層では疎水性繊維の含有率を高め、コーヒー粉に直接接しない層では疎水性繊維の含有率を下げることが好ましい（特許第3674486号）。

【００２２】

一方、袋本体２の表裏の矩形面２ａ、２ｂの外表面にそれぞれ設けられている掛止部材１０Ａは、上部貼着部１１、中央貼着部１２、アーム部１３及び掛止部１４からなり、板紙、プラスチックシート等の薄板状材料の打ち抜きにより形成され、所定の部位で袋本体２に貼着されている。図１の掛止部材１０Ａにおいて、細かいドットで塗りつぶした部分が、袋本体２の外表面に熱融着又は接着により貼着された部分であり、粗いドットで塗りつぶした部分が貼着されていない部分である。

【００２３】

掛止部材１０Ａを構成する上部貼着部１１、中央貼着部１２、アーム部１３及び掛止部１４は、いずれも互いに切り離された部分とはなっておらず、連続している。そのため、掛止部材１０Ａを袋本体２に貼着するにあたり、各部の位置ずれを無くし、掛止部材１０Ａの貼着に伴う不良品の発生を低減させることができる。

【００２４】

掛止部材１０Ａを形成する薄板状材料も、ドリップバッグ１Ａの使用後の廃棄性の点から、ポリ乳酸、ポリブチレンサクシネート、ポリエチレンサクシネート等の生分解性材料から形成したものが好ましい。

【００２５】

掛止部材１０Ａの構成部分のうち上部貼着部１１は、袋本体２の開口部３に沿って帯状に形成された部分であり、袋本体２の上部に貼着されている。このように上部貼着部１１を設けることにより、図１（ｃ）のようにコーヒードリップバッグ１００Ａをカップ２００にかけた場合に、袋本体２の開口部３が開いた開口形状を大きく安定化させることができる。

【００２６】

上部貼着部１１の幅（袋本体２の幅方向の上部貼着部１１の長さ）Ｌ１は、掛止部１４の幅Ｌ２以下とすることが好ましく、特に袋本体２の開口幅Ｌ１’の４５％～５５％が好ましい。これにより、コーヒードリップバッグ１００Ａをカップ２００にかけた場合に、開口部３の開口形状を略正方形にし、開口部３への注湯をより一層容易にすることができ、かつ、掛止部材１０Ａの形成に必要な薄板状材料を必要最小限に抑えることができる。即ち、上部貼着部１１をさらに広幅に形成して必要により折線を形成したり、上部貼着部の両端部から下方に帯状部分を延設したりしても開口部３は広く開口するが、掛止部材１０Ａの形成に必要な薄板状材料が無用に増大し、製造コストが上昇する。

【００２７】

中央貼着部１２は、上部貼着部１１から袋本体２の底部側に延設された部分であり、袋本体２に貼着されている。なお、本発明において、中央貼着部１２は、少なくともその底部側の一部が袋本体に貼着されていればよく、上部貼着部１１の袋本体との貼着領域と、中央貼着部１２の袋本体との貼着領域とは、必ずしも連続させる必要はないが、本実施例においては、中央貼着部１２の上端から下端にかけての貼着領域を連続させることにより、逆Ｔ字状の貼着領域が形成されている。

【００２８】

中央貼着部１２の幅については、袋本体２の開口を確実にする点から、中央貼着部１２の最大幅Ｌ３を袋本体２の開口幅Ｌ１’の１／３～３／４程度とすることが好ましい。

【００２９】

アーム部１３は、中央貼着部１２の左右両側に一対形成されており、それぞれ中央貼着部１２の下端部と連続している。また、アーム部１３は、その下端部のみが袋本体２に貼着されており、それよりも上方では袋本体に貼着されておらず、袋本体２から引き起こし可能となっている。

【００３０】

掛止部１４は、アーム部１３の外側を囲むように、該アーム部１３に隣接して形成され、アーム部１３の上端部と連続している。掛止部１４は袋本体２に貼着されておらず、コーヒードリップバッグ１００Ａをカップ２００に掛ける際に、カップの側壁に直接引っ掛ける部分となるものであるため、この掛止部１４がアーム部１３の外側に形成されていることにより、カップ壁への掛け幅が十分に確保される。このため、コーヒードリップバッグ１００Ａをカップ２００に掛けたときに袋本体２が左右に（袋本体の側縁部側に）傾かず、注湯時に開口部３を上向きに維持しておくことが可能となる。

【００３１】

コーヒードリップバッグ１００Ａの使用方法としては、まず、ミシン目４に沿って袋本体２の上端部を切除することにより袋本体２を開口し、図１（ｂ）に矢印Ａで示したように一対の掛止部１４の下端を引っ張ってアーム部１３と掛止部１４を引き起こす。これらをさらに大きく引き起こし、図１（ｃ）に示したように、掛止部１４をカップ２００の側壁２０１にかける。こうしてコーヒードリップバッグ１００Ａをカップ２００に掛止した後、袋本体２の開口部３から注湯する。ここで、コーヒードリップバッグ１００Ａの各部の切り込み形状はシンプルであることから、消費者は、コーヒードリップバッグ１００Ａの使用時に、格別に使用説明書を読まなくても、引き起こすべき部分を一目瞭然に理解することができる。したがって、このコーヒードリップバッグ１００Ａによれば、消費者の誤使用を防止することができる。

【００３２】

また、このようにコーヒードリップバッグ１００Ａをカップ２００に掛けた状態で、袋本体２の対向する外表面に貼着されている中央貼着部１２が、アーム部１３によって矢印Ｂのように互いに反対方向に引っ張られることにより袋本体２が開口する。このとき、開口部３に沿って上部貼着部１１が貼着されていることにより、開口部３は上部貼着部１１の幅Ｌ１で開く。また、掛止部１４がアーム部１３を外側に引っ張りつつ、カップ２００を矢印Ｃのように押さえ付ける。このため、コーヒードリップバッグ１００Ａは、安定した開口状態でカップ２００に装着される。

【００３３】

なお、以上の説明では、コーヒードリップバッグ１００Ａをミシン目４で開口した後、カップ２００に掛止する例を示したが、本発明のドリップバッグの使用方法はこれに限られず、ドリップバッグ１Ａをカップ２００にセットした後、ドリップバッグ１Ａ内にコーヒー粉を入れて注湯しても良い。

【００３４】

本発明のドリップバッグは種々の態様をとることができる。例えば、図３Ａ（ａ）のコーヒードリップバッグ１００Ｂ（ドリップバッグ１Ｂ）は、袋本体２の表裏の掛止部材１０Ｂの上部貼着部１１の上端部に、段状の突出部１１ａを、それらが袋本体２の上端部から交互に突出するように設けたものである。この場合、一対の掛止部材１０Ｂの突出部１１ａは、互いに重ならないように突出している。このコーヒードリップバッグ１００Ｂによれば、図３Ａ（ｂ）に示すように、開封時に交互に突出している突出部１１ａを互いに引き離すことにより、袋本体２の上縁のシール部が引き剥され、開口する。したがって、容易に袋本体２を開口することが可能となる。さらに、一対の掛止部材１０Ｂの突出部１１ａは互いに重ならない形状となっているので、一枚の薄板状材料から一対の掛止部材１０を打ち抜く際に、図３Ｂに示すように、突出部１１ａ側を対向させた配置とすることに

より、薄板状材料の抜きカスを最小限に抑えて無駄なく打ち抜くことができる。

【００３５】

図４のコーヒードリップバッグ１００Ｃ（ドリップバッグ１Ｃ）は、図１のコーヒードリップバッグ１００Ａの掛止部材１０Ａに対し、上部貼着部１１の幅Ｌ１と掛止部１４の幅Ｌ２とをそろえ、また、アーム部１３の外側（中央貼着部１２と反対側）の縁辺に隣接すると共に袋本体２に貼着されている外側貼着部１５を設けたものである。図４のコーヒードリップバッグ１００Ｃの掛止部材１０Ｃのように、上部貼着部１１の幅Ｌ１と掛止部１４の幅Ｌ２を揃え、掛止部材１０Ｃの外形を略矩形にすることにより、掛止部材１０Ｃの形成に伴う打ち抜き屑を最小限に減らすことができる。また、外側貼着部１５を設けることで、アーム部１３の基部の両側に掛止部材と通水性濾過性シートとの貼着領域が形成されるので、アーム部１３の下端部に負荷が集中しても、その近傍で通水性濾過性シートが破れることを防止することができる。さらに、外側貼着部１５を設けることで、ドリップバッグ１Ｃを開いた際に、バッグ１Ｃが角柱状に開く。そのため、図１（ｃ）に示したように、袋本体２にくびれができ、袋本体２に一度に注湯できる量が低減することを防止できる。なお、外側貼着部１５は、少なくともアーム部１３の下端部外側において、該アーム部１３と隣接して設ければよく、アーム部１３の上端部にまで延設しなくてもよい。

【００３６】

図５のコーヒードリップバッグ１００Ｄ（ドリップバッグ１Ｄ）は、図４のコーヒードリップバッグ１００Ｃの掛止部材１０Ｃに対し、掛止部材１０Ｄにおいて、掛止部１４を上部貼着部１１の上部外側まで延設し、掛止部１４で上部貼着部１１が囲まれるようにしたものである。一般に、人には、突出端を摘み上げようとする傾向があるが、この掛止部材１０Ｄによれば、掛止部材１０Ｄの上端部が、上部貼着部１１ではなく、掛止部１４の延設部分であるため、消費者が、コーヒードリップバッグ１００Ｄの使用時に、誤って上部貼着部１１の左右の突出端を摘み上げることを防止できる。

【００３７】

図６のコーヒードリップバッグ１００Ｅ（ドリップバッグ１Ｅ）は、袋本体２及び掛止部材１０Ｅの平面形状をそれぞれ扇形、より具体的には略１／４円形状とし、掛止部材１０Ｅに、上部貼着部１１、中央貼着部１２、アーム部１３、外側貼着部１５及び掛止部１４を形成したものである。このように袋本体２の平面形状を扇形にすることにより、意匠性が高まる。また、袋本体２の下端を錐形状とすることで、抽出液が錐形状の頂点からドリップされるので、より濃度の高いコーヒー液を得ることができる。

【００３８】

また、このコーヒードリップバッグ１００Ｅでは、上部貼着部１１が、袋本体２の開口部の略全辺に沿って設けられているので、開口部３の開口形状を大きくするため、上部貼着部の幅方向の中心を通る折れ線Ｍ１が、上部貼着部１１の上端から中央貼着部１２の下端にかけて形成されている。これにより、図６（ｃ）に示したように、上面視矩形になる開口部３の頂点が折線Ｍ１上に形成される。したがって、このコーヒードリップバッグ１００Ｅによっても開口部３の開口形状を大きくし、安定させることができる。

【００３９】

なお、本実施例では、アーム部１３の下端部には貼着部は形成されておらず、その全域が通水性濾過性シートに対する非貼着部となっている。これにより袋本体２と掛止部材１０Ｅとの貼着部から掛止部材１０Ｅへの湯の浸み込みを防ぎ、注湯後における袋本体２の開口形状を一層きれいに保つことができる。

【００４０】

図７のコーヒードリップバッグ１００Ｆ（ドリップバッグ１Ｆ）は、図６のコーヒードリップバッグ１００Ｅにおいて、外側貼着部１５にも折れ線Ｍ２を形成し、また、アーム部１３の下端部を袋本体２に貼着したものである。これにより、コーヒードリップバッグ１００Ｆをカップ２００に掛けたときの袋本体２の形状を略円錐形とし、袋本体２の開口形状をより大きく保つことができる。

【００４１】

本発明のドリップバッグは、さらに種々の態様をとることができ、上述の変形態様は、適宜種々組み合わせることができる。

【００４２】

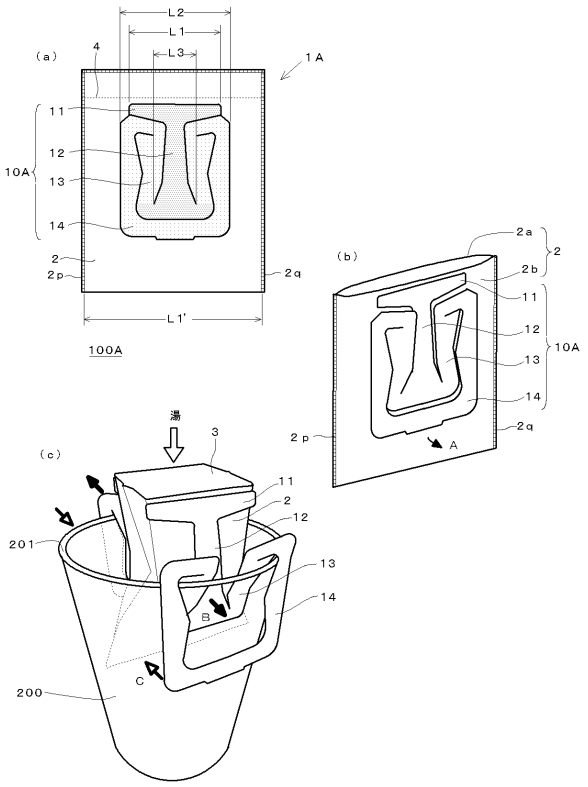
また、本発明のドリップバッグに充填する抽出材料としては、コーヒー粉に代えて、紅茶、緑茶、漢方薬等を使用してもよい。それにより、種々の飲料ドリップバッグを得ることができる。

【符号の説明】

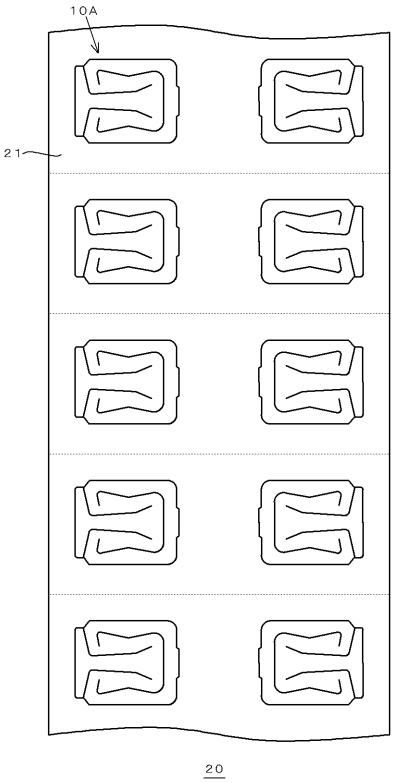
【００４３】

１、１Ａ、１Ｂ、１Ｃ、１Ｄ、１Ｅ、１Ｆ　ドリップバッグ
２　袋本体
２ａ、２ｂ　矩形面
２ｐ、２ｑ　側縁
３　開口部
４　ミシン目
１０、１０Ａ、１０Ｂ、１０Ｃ、１０Ｄ、１０Ｅ、１０Ｆ　掛止部材
１１　上部貼着部
１１ａ　突出部
１２　中央貼着部
１３　アーム部
１４　掛止部
１５　外側貼着部
２０　ドリップバッグ用シート
２１　通水性濾過性シート
３０　補強片
１００、１００Ａ、１００Ｂ、１００Ｃ、１００Ｄ、１００Ｅ、１００Ｆ　コーヒードリップバッグ
２００　カップ
２０１　側壁
Ｍ１、Ｍ２　折れ線

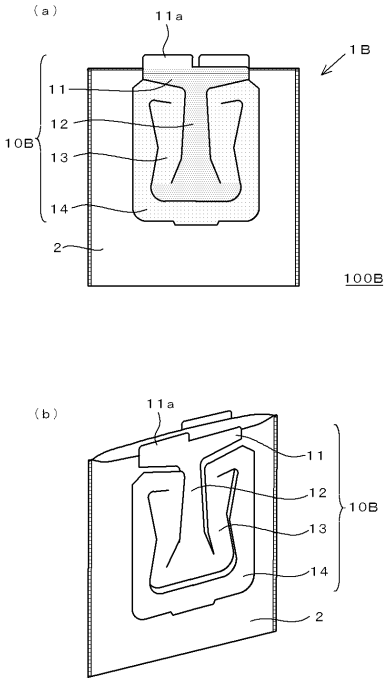
【図１】


(a)
L2
L1
L3
4
1A
11
12
13
14
10A
2
2p
2q
L1'
100A
(b)
2a
2b
2
11
12
13
14
10A
2p
2q
A
(c)
湯
3
11
2
12
201
13
14
B
C
200

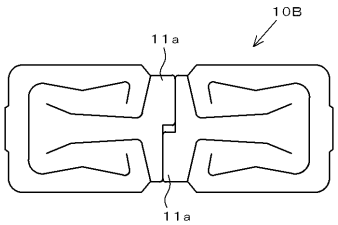
【図２】


10A
21
20

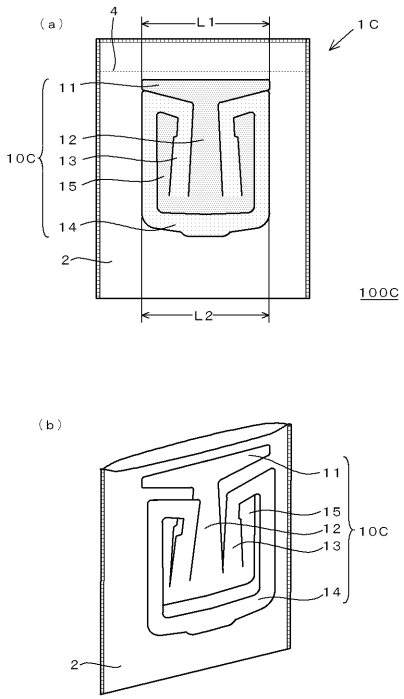
【図３Ａ】


(a)
11a
1B
11
12
13
14
10B
2
100B
(b)
11a
11
12
13
14
10B
2

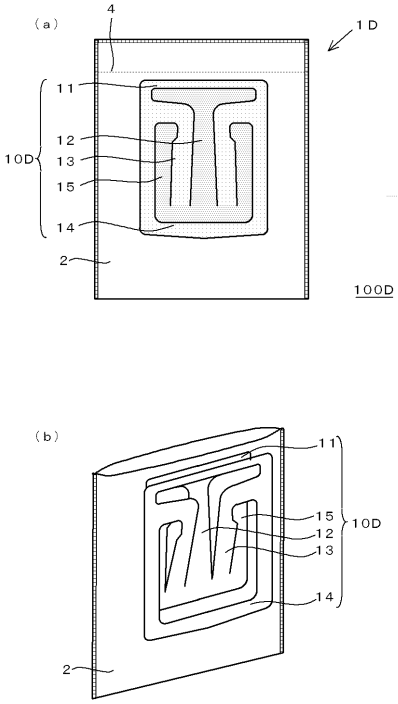
【図３Ｂ】


10B
11a
11a

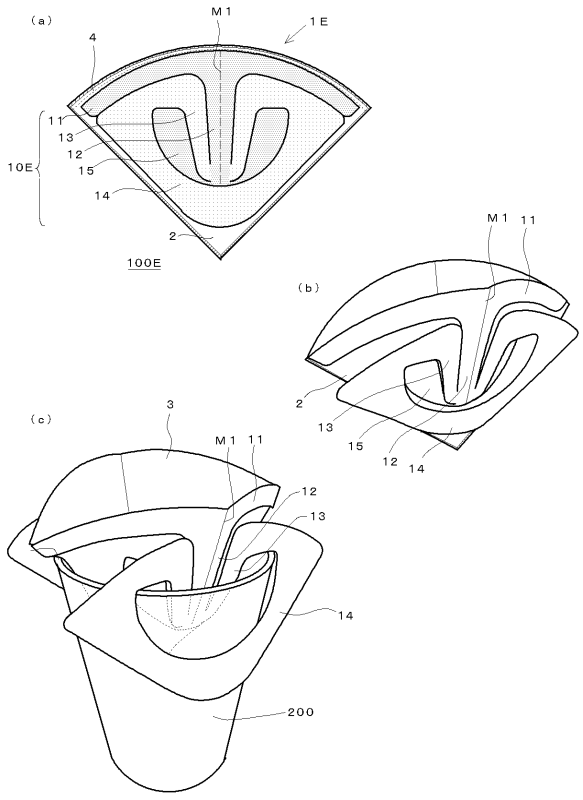
【図４】


(a)
4
L1
1C
11
12
13
15
14
10C
2
100C
L2
(b)
11
15
12
13
10C
14
2

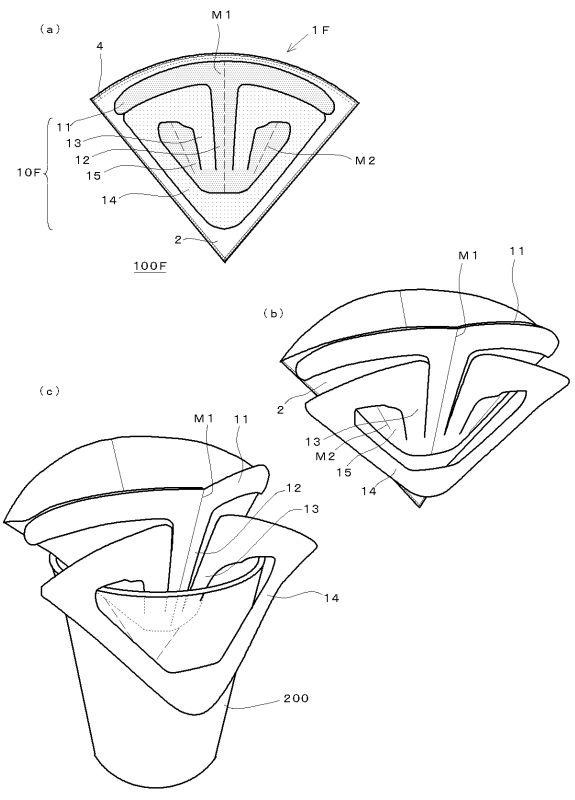
【図５】


(a)
4
1D
11
12
13
15
14
10D
2
100D
(b)
11
15
12
13
10D
14
2

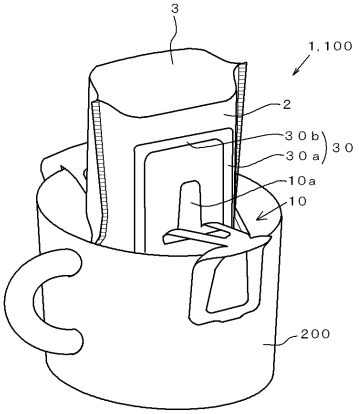
【図６】


(a)
M1
1E
4
11
13
12
15
14
10E
2
100E
(b)
M1
11
2
13
15
12
14
(c)
3
M1
11
12
13
14
200

【図７】


(a)
M1
1F
4
11
13
12
15
14
10F
M2
2
100F
(b)
M1
11
2
13
M2
15
14
(c)
M1
11
12
13
14
200

【図８】



フロントページの続き

審査官　豊島　ひろみ

(56)参考文献　国際公開第２００９／０２０１３２（WO，Ａ１）
特開２０００－３２５２３６（ＪＰ，Ａ）
特開２００５－３４９１７１（ＪＰ，Ａ）

(58)調査した分野(Int.Cl.，ＤＢ名)
Ａ４７Ｊ　３１／００　－　３１／６０
Ｂ６５Ｄ　７７／００